



## 私の思い出写真館

# モンゴルを知る



**梶田 邦孝**  
日本経済研究所  
取締役会長

2012年5月、いまだ肌寒い季節のモンゴル・ウランバートルへ出張した。右上に挙げた写真がその時の一枚である。小高い丘からウランバートルの中心街を眺めた。写真ではビルが林立している様子が見られるが、その中には20階を超えるビルもいくつか建ち始めていた。

むろん、ゲルという移動式・テント式の住居も見られるが、それらは主に郊外の山沿いに集中していた。

出張の目的は、勤務している日本経済研究所(日本政策投資銀行100%出資の調査会社)のモンゴル調査に関連したものである。

モンゴルというとわれわれのイメージではチンギス・ハン、大草原の草競馬、横綱白鵬といったところであるが、今、モンゴルは豊富な資源等と相まって、大きく変わろうとしている。

モンゴルはその国土が日本の4倍、人口は約280万人、国民所得は1人当たり3,000USドル(2011年)であるが、現在急速に経済成長を実現してきている。首都ウランバートルはモンゴルの東寄りの中心部に位置しているが、その人口は約130万人で、典型的な一極集中都市である。



小高い丘から見たウランバートルの市街

現在、モンゴルと日本との関係は急速に親密化していると思われるが、その主力産業は、農業(牧畜)、鉱業(石炭、金属)であり、国民所得の低さ等からいっても、国は産業の多様化、付加価値化に全力を挙げている。

近隣に、中国・ロシアが控え、歴史的にも地勢的にも深い関係にあるが、モンゴルは両国以外の国、わけても日本との関係深化を強く希望している。

2004年のモンゴル調査によれば、「今後モンゴルが最も親しくすべき国は日本」と考えられているようである。

日本も資源エネルギーに着目するだけでなくモンゴルの立場も踏まえて、中長期的見地に立って、経済・文化・環境等幅広く付き合っていくことが大切と思われる。

最後に現地でお会いした某理工系国立大学の日本語教授(女性)の言葉を記しておきたい。

「自分が日本語を学び始めた30年ほど前は日本語を学びたい学生がたくさんいたが、今は激減している。モンゴルの若者が、昔のようにもっと日本語を学びたいと思うような魅力的な国になってください」。